自己への関心と大学における学習への動機づけが 保育者養成にもつ役割

設楽紗英子

(関東短期大学 こども学科)

キーワード: 自己不一致, 実習, 動機づけ

The role of concerning for self and learning at college on training for childcare workers

Saeko SHITARA

(Kanto Junior College)

Key words: self-discrepancy, teaching practice, motivation

【問題】

保育者養成課程では、カリキュラムに適應できず実習でまずく学生への指導を課題とする声が高まっている(c.f., 長谷部(2004))。学生の視点からすれば、保育者として目指す自己に近づくことが、実習を乗り越えることにつながると考えられる(調査1)。一方、養成側の指導上の視点からすると、実習先の評価と、学生の自己との向き合いや勉強への意識などの特徴との関連を検討することが重要である(調査2)。

調査1

実習における理想自己と現実自己の間の不一致の程度と、実習の自己評価の関連を検討する。

【方法】

対象者 保育者養成系短期大学の1・2年生160名(男子27名, 女子132名, 性別不明1名, 平均年齢19.6歳)。

調査時期 2年生は2011年10月に, 1年生は2012年4月に, 実習後, 評価が返される前に調査を実施した。

調査内容 **保育者としての理想と現実の自己不一致** 小平(2002)の自己不一致測定票を参考に, 実習において「こうありたい」と思う理想の姿を思い浮かべ, 5つまで記述するよう求めた。そして, それぞれの記述に関して, 実際の自分はどの程度あてはまるのかを, 5件法で評定するよう求めた。回答ラベルは「全くあてはまらない(1)~非常にあてはまる(5)」であった。

実習の自己評価 幼稚園実習とその後に行われる保育園実習それぞれについて, 成績を自己評価するよう求めた。

【結果と考察】

自己不一致の得点により上位から3群に分け, 実習の自己評価について1要因の分散分析を行った(Table 1)。その結果, 保育園実習について, 高群と低群の間に有意な差がみられた。実習で理想自己をできる限り実現できることが, 実習を肯定的に終わらせることにつながると考えられる。

Table 1 理想・現実自己不一致得点による実習自己評価の分散分析

	理想・現実自己不一致						3群間の平均値の差 の検定結果
	n			高群	中群	低群	
	高群	中群	低群	M	M	M	
				(SD)	(SD)	(SD)	
実習自己評価							
幼稚園	26	48	52	2.46 (.71)	2.58 (.61)	2.77 (.58)	$F(2,123)=2.40, n.s.$
保育園	25	47	51	3.08 (1.15)	3.43 (.65)	3.65 (.74)	$F(2,120)=4.13, p<.05$ 高群<低群

調査2

実際の実習先から得られる評価と, 学生の特徴(実習に対する自己不一致の程度, 自己の内面への関心, 勉強への動機

づけ)との関連を, 探索的に検討する。

【方法】

対象者 調査1の2年生46名(男子7名, 女子39名)。

調査時期 調査1の後, 実習の評価が返された後に実施した。

調査内容 **保育者としての理想と現実の自己不一致** 小平(2002)の自己不一致測定票を参考にした。

自己の内面への関心 岡田(1991)の内省尺度を用いた。2因子(“内省傾向”, “軽薄短小”)からなり, 内省傾向で修正済み項目合計相関が負であった1項目を除いた10項目に対し, 7件法で回答を求めた。回答ラベルは「全くあてはまらない(1)~とてもあてはまる(7)」であった。

動機づけ 速水ら(1996)の動機づけ尺度を用いた。4因子28項目(“外発的動機づけ”, “取り入れ的動機づけ”, “同一化的動機づけ”, “内発的動機づけ”)からなり, 5件法で回答を求めた。回答ラベルは「どんな時もあてはまらない(1)~いつもあてはまる(5)」であった。

実習評価 保育実習と教育実習についてそれぞれ, 実習先から返された成績を回答するよう求めた。

【結果と考察】

実習評価と学生の特徴の各尺度得点を標準化し, クラスタ分析を行った(平均ユークリッド距離によるWard法)。クラスタの解釈可能性から判断し, 3クラスタによる分類が, 学生の状況を最もよく表していると考えられた(Figure 1)。各クラスタの特徴は以下の通りである。

第1クラスタ(7名): 実習評価と自己一致が比較的良好, 内省と軽さの両方の内面への関心の持ち方を示す。しかし, 勉強に対しては消極的でも積極的でもない(現場型)。

第2クラスタ(34名): 実習評価は平均的であり, 自己不一致や内省傾向にも比較的特徴はみられない。勉強に対しては積極さを持っている(適応型)。

第3クラスタ(5名): 実習評価が低い。自己への関心が薄く, 勉強にも前向きな意義は見出していない(つまずき型)。つまずき型の特徴より, 学生自身の評価による自己不一致の問題だけではなく, 自己理解と養成課程で勉強することへの具体的な意義を持たせていく指導が必要だろう。

Figure 1 実習評価と学生の特徴のクラスタパターン